

# 目次

\*執筆者

言海の研究…はじめに	今野真二	1
序章 『言海』研究史	小野春菜	19
第一章 『言海』にながれこむもの	小野春菜	61
第一節 江戸期の辞書との関係		63
第二節 辞書の形態の模索		80
第二章 『言海』はどのように成ったか	小野春菜	97
第一節 内容見本からわかること		99
第二節 稿本『言海』からわかること		115
第三節 校正刷からわかること		143

第三章 『言海』はどのような辞書か……………	165
第一節 「本書編纂ノ大意」「凡例」から探る……………	今野真二・小野春菜 167
第二節 『言海』の体例(組織)について……………	今野真二・小野春菜 184
第三節 「普通語」について……………	今野真二 205
第四章 明治の辞書と『言海』……………	231
第一節 高橋五郎『いろは辞典』との対照……………	今野真二 233
第二節 山田美妙『日本大辞書』との対照……………	小野春菜 267
第五章 明治の日本語と『言海』……………	295
第一節 明治期出版物と『言海』……………	小野春菜 297
第二節 語彙的観点からみた『言海』……………	今野真二・小野春菜 311
第三節 表記的観点からみた『言海』……………	今野真二 325
第四節 『言海』と非辞書体資料……………	今野真二 340
第六章 『言海』以降の辞書……………	小野春菜 359
第一節 『大日本国語辞典』と『言海』……………	361
第二節 『言海』から『大言海』へ……………	381
第三節 『言海』と『大言海』……………	396
終章 近代辞書としての『言海』……………	今野真二 411
参考文献……………	437

## 言海の研究…はじめに

◇本書が成るまで

二〇一三年に港の人に出版していただいた『言海』と明治の日本語の冒頭ちかくに、当該書の目標を「『言海』そのものに分け入ることで、明治期の日本語に関しての知見を得る、ということ」（八頁）であると述べた。それは文字通りの意味合いであると同時に、「『言海』そのものに分け入ること」があまり積極的になされていないことに対しての稿者なりの「反論」のようなものでもあった。

さいわいにも、当該書の、木村一氏による書評が『日本語の研究』第十一巻一号（二〇一五年）に載せられた。<sup>註1</sup>二〇一四年には『言海』を読む』（角川選書）も出版させていただいたが、これは一般読者を視野に入れて選書として執筆し、出版されたものであるので、本書中での言及は最小限にとどめた（以下、今野真一（二〇一四a）とする）。

二〇一五年四月には稿者の勤務している大学の大学院の修士課程と博士課程に大学院生を迎えることになった。偶然のことではあるが、両名とも『言海』についての研究を希望していた。博士課程に迎えた大学院生が本書の共著者である小野春菜である。そのようなことであつたので、二〇一五年四月からは毎日のように『言海』についての意見交換、議論をするような日々が始まった。そうした議論には、時にかつての同僚であつた荒尾禎秀氏も加わってくださつた。このような「偶然」はなかなかないことであらう。

地道な作業を厭わず、分析能力に優れている大学院生二人との意見交換によって、二〇一三年の『言海』と明治の日本語』出版の時点での知見の幾つかは修正する必要があるが生じ、また幾つかはさらなる到達に至つたと考える。本書

中で、そうしたことについて、対照的に一つ一つふれることはしないので、本書に述べられていることが現時点での稿者及び共著者の考えであると理解していただければと思う。

本書は稿者と小野春菜との共著である。どこを誰が執筆したかについては、目次に明示した。稿者は本書全体の「調子」を整えるための「調整」をし、最後まで意見交換、議論はしたが、基本的に分担箇所についての責任は執筆者が負うことになる。

#### ◇本書の目的と試み

本書の目的は辞書体資料である『言海』の「全貌」をできる限り明らかにすることにある。辞書体資料であるので、まずはどのように編集されている辞書であるか、そしてどのようなことを重視している辞書であるか、を明らかにする必要がある。さらには、明治期の日本語の中に、『言海』を置くとうなるか、についても考えておく必要がある。

稿者は何らかの「編集」が施されている文献⇨テキストを「辞書体資料」と呼び、そうした「編集」が施されていない文献⇨テキストを「辞書体資料」に対して「非辞書体資料」と呼んできた。「非辞書体資料」という呼称がこない呼称であることは承知しているが、現時点ではそれにかわるふさわしい呼称がないので、本書でもその呼称及び概念を使うことにする。

「編集」は人間がすることであるので、特定できているかいないかは別として、「辞書体資料」には編集者が必ず存在する。『言海』の編集者は大槻文彦である。これまでも、『言海』といえば大槻文彦、大槻文彦といえば『言海』と、あたかも「付合」のように言われることが少なくなかった。それは明治期に成った辞書としては当然のことともいえるように、時にそれは「過剰」に編集者個人を追求するという「癖」となって現われることもあったのではないか。

本書においても、大槻文彦を話題にすることはもちろんあるが、それが「過剰」にならないように気を配った。『言海』がこれまでの研究において、どのように取り上げられ、論じられてきたかについては、序章で詳しく述べた。

これまでの辞書研究においては、まず系譜的関が話題となり、先行する辞書をどのように受け継いでいるかという点までたつても、当該辞書を使った日本語研究を行なうことができない、ということになる。系譜的関を明らかにすることは、辞書研究の「終点」ではなく、どちらかといえば「起点」あるいは「前提」にちかひのではないだろうか。そしてまた、系譜的関を明らかにするためのさまざまな「検証」はそれそのものを目的としながら、その一方では、「辞書体資料」を考え、そこにふみこむための「一階梯」でもあると考える。先行する辞書体資料を『言海』がどのように継承しているか、については第一章で述べた。「継承」には具体的なそれと、原理面におけるそれと、二面がある。

「試み」についても一言述べておきたい。先ほど記したように、本書は稿者と小野春菜との共著として執筆されている。しかし、お互いの執筆箇所について、これまでどおり、意見交換、議論を重ねた。分担箇所の内容については、その箇所の執筆者にプライオリティがあることはいうまでもないが、本書全体としても、できるかぎりなめらかなものとなるように統一をはかった。

#### ◇本書で使った資料とその呼称

『言海』は明治二十二（一八八九）年三月に第一冊（あ部～お部）、同年十月に第二冊（か部～さ部）、明治二十三年五月には第三冊（し部～ち部）、二十四年四月には第四冊（つ部～を部）が刊行されて完結した。したがって、まずは

## 第二章

### 『言海』

はどのように成ったか

## 第一節 内容見本からわかること

『言海』が当初目途されていた官版としての出版から私版へと移行したことは、すでに述べた。「ことばのうみのおくがき」には、私版刊行にむけて、「私財をかきあつめて資本をそなへ」（三頁）たことが記述されている。また、発売方法については、次のように示されている（四頁）。

本書刊行のはじめに、編輯局工場と約して、全部、明年九月に完結せしめむと豫算したり。又、書林は、舊知なる小林新兵衛、牧野善兵衛、三木佐助の三氏に發賣の事を托せしに、豫約發賣の方法よからむとす、めらるゝにしたがひて、全部を四冊にわかちて、第壹冊は三月、第二冊は五月、第三冊は七月、第四冊は九月中に發行せむと假定しぬ。

このように、『言海』は「豫約發賣の方法」を採り、「全部を四冊にわかちて」分冊で出版された。また、販売を促進するための内容見本<sup>註1</sup>が作成されていた。

『図録日本辞書言海』には、明治二十二年と同二十四年に作成された一枚刷りの内容見本が、原寸大で複製されている。この二種類の他に、私版の刊行前後に作成された『言海』の内容見本があるかどうかは、確認できていない。本書では、この複製を使用して調査を行なった。また、『言海』の成立という点から、明治二十二年のものに注目する。明治二十二年に作成された内容見本は、同年一月二十二日の『東京日日新聞』朝刊に別刷で掲載されている。